

仲蔵はなにを演じたか

——ドラマ考証の舞台裏——

一 初代中村仲蔵という大課題

忠臣蔵の定九郎にて古今未曾有の大手柄をなしてより、いよ／＼評判よく、それよりは年々の昇進は、竜の昇天するが如く、凄まじき勢力ひなり (三代目中村仲蔵『手前味噌』⁽¹⁾)

歌舞伎役者・初代中村仲蔵の名を歴史にとどめたのは、紛れもなく『仮名手本忠臣蔵』五段目の斧定九郎の型の変革であろう。

そして「その時」を契機に、いわゆる名門の出にあらずとも名題役者へ上ったとされる出世譚が講談（近年では六代目神田伯山が得意とする）、そして「蛇の目傘」題でも演じられる落語（八代目林家正蔵が得意とした⁽²⁾）に創作されて伝わり、近代以降も仲蔵の出世譚は松井今朝子による小説『仲蔵狂乱』⁽³⁾、この小説を映像化した時代劇ドラマ『忠臣蔵うら話 仲蔵狂乱』⁽⁴⁾があり、「江戸時代の

吉 田 弥 生

役者の出世話」として物語られ、再生され続けてきた。

二〇二二年春、そうした仲蔵出世譚の新たな創作が企画された。そして、筆者はそれへ参加、協力の機会を得ることとなった。新たな創作とはNHKによるテレビドラマであり、協力の内容は監修と考証。「白羽の矢が立つ」という感覚を人生で味わえたのは幸いであつたが、その後まもなく始まったのは、大きな課題との苦闘だった。

ドラマで仲蔵を演じるのは当代の中村勘九郎丈、脚本・演出・監督は源孝志氏、タイトルは『忠臣蔵狂詩曲No.5 中村仲蔵出世階段（ちゆうしんぐらラプソディー だいごばんなかむらなかぞうしゅっせのきざはし）』⁽⁵⁾と決まっていた。歌舞伎の外題風に漢字が並んでいたが、歌舞伎には縁起を重んじて五文字あるいは七文字で趣向を凝らすきまりがあるのに比して、このルールにもかかなつ

ておらず、題材に対して好ましくないと考え、まずはこの点について指摘したものの、決定を超える妙案もなく、結局は脚本家の創作を重んじることとした。

さて、考証はパートに分かれて行われたが、時代風俗については東京学芸大学名誉教授の大石学氏、歌舞伎制作と劇場構造については国立劇場の石橋健一郎氏が主に担当、筆者の担当は「江戸歌舞伎」である。初代仲蔵に関する文献を紐解いて、ドラマにおける劇中劇の演目選定や脚本に使われる用語の確認、当時の劇界における年中行事や役者の身分制度など、まさしく江戸歌舞伎の真実という巨大な課題との闘いとなった。なかでも最も苦心したのは、ドラマに用いられる仲蔵のエピソードに合わせた演目選定である。その時、仲蔵はなにを演じたのか。あわせてドラマ制作側の問いに応じ、演じる俳優の希望に叶う演目をどのように抽出したか。本稿はその考証過程を綴る機会とした。

二 『月雪花寝物語』と『手前味噌』

ドラマの原作は、当初は落語「中村仲蔵」を検討されていたが、初代仲蔵自身の手記と考えられている『月雪花寝物語』および『手前味噌』とした。

『月雪花寝物語』⁽⁶⁾は成立年未詳ながら、その巻末に

一流は京江戸難波三番叟 四季の志賀山家の三腹

千穂万亀代々叶

松竹亭秀鶴(花押)

養母・志賀山お俊から教えを受けた志賀山流にからめた歌をもつて結んでおり、たしかに『月雪花寝物語』が「秀鶴」(初代仲蔵の俳名)によるものであり、

この七巻は俳優中村仲蔵みずから書ける日記なり。ゆえ有りて柳亭種彦翁もたりしを、かしこ、ここ、心とどまる節を抜き出して写しておく。

天保十二丑(一八四一) 卯月 雨の屋

江戸の戯作者・柳亭種彦が所持していたものを、「雨の屋」が「心とどまる節を」抜粋、書写したものが伝わっているということがわかる。この「雨の屋」が誰かという点も未詳だが、当該箇所の後へ「柳亭翁に因む柳志亭鶴」が「雨の屋隣春先生珍藏」と記しており(嘉永六(一八五三年)水無月)、「雨の屋」の名が「隣春」と明かされる。嘉永期に活躍し、雨廼屋を画号にもつ絵師の福島隣春ではないだろうか。

もう一冊の『手前味噌』は、家系の初代・二代を説き、それから三代の自叙伝に移るという形式、『日本近代思想大系一八芸能』(二九八八年刊行、岩波書店)にも「手前味噌(抄)」として一部収録

され、解題、校注が載る。初代仲蔵については、養父である長頃の中山小十郎、養母・志賀山お俊の代から記述され、仲蔵の定九郎役の工夫と出世の過程を事細かなエピソードで綴っており、

例の如く妙見さまへ日参し、本所の南割下水の辺まで来懸りし頃、ポツ／＼大粒の雨が降って来たなと思ふうち、夏の日の常なれば、そちことするうち、大夕立となり、(中略)ズブ濡れにてこの蕎麦屋へ駆け込み「ア、酷い雨に出つくはした」と、いふを思はず見れば、年の頃三十四五とも覺しき浪人にて(中略)破れた蛇の目傘をさし、黒羽二重の引解の単物を着て、肩の出るまでに腕まくりして三のづまで裾をからげ(中略)五分月代に水が含みしを、手にて撫でればダラ／＼と雫落ちる。

仲蔵は「これを見て、心中で横手を打ち、これぞ今度の役にそつくらはまりし拵へなりと、独り悦び」「これぞ妙見さまのお告げならんと思ふ」と早速に定九郎の扮装へ写した件が説かれる。

そのように『手前味噌』は特にエピソードの宝庫であり、物語の骨格作りに用いられたのだが、出世譚をすべて埋めるだけの上演情報は揃わなかったのである。

三 『長生殿常校』の創演へ

「定九郎役で出世」以前のエピソードで有名なものは、講談・落語の「中村仲蔵」にも描かれる、かの「四世團十郎と共演し、「申しあげまする」のセリフを忘れた」件であり、制作側からは、その時の上演目考証を求められた。

『手前味噌』の該当箇所には次のようにある。

申しあげますの役は、大詰の御殿場へ出るのなり。その時の座頭は、四代目市川團十郎にて、衣裳上下家老の拵へにて、平舞台に住まひ、高二重上手には上使、下手に殿さま、上下に諸士居並ぶといふ大廓へ、仲蔵バタ／＼にて、揚幕から出て申しあげますの役なるその日、初日ゆゑ、少し早めに揚幕へ来て、キツカケを待ち、バタ／＼にて出て花道の附際へ住まひ「申しあげます」と言ふ。團十郎「遽だしい何事じぢや」と問ふ。仲蔵口上を言はうとせしが、書拔をよく見ぬゆゑ、せりふを皆無忘れてグツト詰まる。如何はせんとハツと思ひしが、度胸よき仲蔵なれば、何喰はぬ顔にて「御免」と、いひて、團十郎の傍へツカ／＼と来り、耳へ口を寄せ「親方忘れました」といふ。團十郎「ヨシ／＼」と點頭「これへと申せ」と言ふ。

この展開は結局「首尾よく幕になりたり。」で、「團十郎ほかの立者に「今日の頓智は人の及ばぬところなり」と称賛されるに至った。

ところで、このエピソードの上演演目がなんであるかが『手前味噌』には記されていないのだが、結論から述べてしまうと、該当する演目は、宝暦六年（二七五六）四月、中村座上演『長生殿常桜（ちようせいいでんふだんざくら）』と考証した。この上演では、四代目市川團十郎が大道寺旗之介を、初代中村仲蔵（当時は中蔵）は一之森定七を演じた。以下、当該上演と考証に至った根拠を明かそう。まずは、初代仲蔵の活躍期と該当時期を検討しなければならない。

伊原敏郎『近世日本演劇史』⁽⁷⁾には、「斯くの如くして、宝暦七年（廿二歳）の頃より次第に世間の注目する処となりしが、宝暦八年十一月、市村座へ転じ、翌十年十一月再び中村座へ復して中蔵を改めて始めて仲蔵といひき。」とあり、この「宝暦七年」より以前で近い時期と考えるのが自然である。

そこで、四代目團十郎が二代目松本幸四郎から襲名をした宝暦四年十一月以降、宝暦六年十一月までの間で両者が同座した上演から検討をした。また、演目は『手前味噌』の記載にあるような「高二重」が舞台にある「御殿場」であり、「家老／上使／諸士／殿さま」が出る時代物・御殿物、つまり一番目作品とみる。

次に、当該期間に両者が同座した中村座の上演作品を調査した。以下にその候補とそれぞれの判断を簡潔に整理する。

- ・宝暦五年一月『若緑錦曾我』…同じ場に出していない
- ・宝暦五年六月『江戸鹿子松竹梅』…一番目だが「時代物・御殿物」でない
- ・宝暦五年八月『信田長者柱』…團十郎の小山判官朝政（平安く鎌倉期の武将）、仲蔵（当時は中蔵）の楠小舟次としまさ。「家老の拵へ」ではなさそう。
- ・宝暦五年十一月『惶弓勢源氏』…團十郎の鎮西八郎為朝。これも「家老の拵へ」と違ふ。
- ・宝暦六年二月『寿三升曾我』…團十郎の工藤。「諸士」は並ぶが、「申し上げます」の該当役が現行上演の「対面」に見当たらない。
- ・宝暦六年四月、『長生殿常桜』…團十郎が大道寺旗之介、仲蔵は一之森定七を演じた。「時代物・御殿物」とみられる。（ちなみに二番目は「富士筑波卯月里」（助六））
- ・宝暦六年七月『月湊英雄鑑』…「国姓爺合戦」。團十郎は「和藤内」の役で該当しない。

該当上演は限定され、宝暦六年四月の『長生殿常桜』と考えら

れる。現存資料は役割番付のみであるが、天明元年（一七八一）八月に中村座で再演時の辻番付も参考に検討したところ、團十郎（ドラマでは市村正親が演じた）の演じた「大だうじたはたの介」（番付の表記）は江戸中期の弘前藩士・大道寺一経⁽⁸⁾をモデルとしたのではないかと考えられる。つまり、実説としては財政困窮の時に家禄の少ない下級武士に自らの家禄を分けて世間から讃えられた人物ということであり、番付の記載（「第一 国守仁、第二 家守義」）を見る限り内容的にも合致をみることができ、「上下の家老姿」もはまるであろう。

かくして、『長生殿常桜』の劇中劇が創演されたのであった。

四 その他の演目選定など

実際の初代仲蔵に関するエピソードから検討した演目として宝暦五年（一七五四）一月、中村座『若緑錦曾我』の第二「鳴神上人北山桜」があった。これは、若衆時代の仲蔵が端役で出演、声變わりの時期で声が悪かったため、初代助五郎に叱られた演目について検討を求められたものである。

宝暦四年（十九歳）正月、母お俊も病死（中略）尚同年十一月より立役として再び中村座の舞台上に現はれたるが、此の前後こそ彼が生涯の一大危機なりき。自傳に曰く、顔見世より

又々舞台上に出て申候（中略）声ははりにて舞台あしく（中略）右につき楽屋なぶり物となりぬ（中略）彼は絶望の余り終に自殺を企つるに至りき。

右は『近世日本演劇史』の記述である。仲蔵が芝居をいちど辞める原因になったものということで、これも仲蔵を考えるに重要な演目である。助五郎に叱られた「自傳」記述こそ見当たらないとはいえ、「宝暦四年十一月前後」頃の中村座で、助五郎と同座した演目ということで検討ができるだろう。ちなみに初代中村助五郎は「古今俳優顔大全」によれば「道外方」。番付を調査したところ、「宝暦四年十一月前後」に初代中村助五郎と仲蔵（当時は中蔵）の同座が明らかなのが当該上演に限定できたのである。

役割番付⁽⁹⁾を見ると「鳴神上人北山桜」では四代目團十郎が鳴神上人を、助五郎が和藤内三官を演じたと判明する。（現行上演の「鳴神」では和藤内は登場しないが、古いかたちの『雷神不動北山桜』には種々の荒事役が出ていた。演出では同じ場面に出ないが、バックステージとしては成り立つか。）

一方、仲蔵は番付表紙（裏面）に名が載るがこの「鳴神」に役名が見えない。端役としては、所化の一人などが想定できる（第一、には「とく竹」という役名が見える）。ちなみに所化の役で活躍する白雲坊と黒雲坊は松本幸四郎・瀬川吉次がつとめている。仲蔵

と同世代のライバル役者と目される幸四郎⁽¹⁰⁾とともに所化をつとめた可能性は濃厚ではないだろうか。四代目團十郎が破戒した鳴神上人を演じ、仲蔵と一緒に大勢の所化たちを演じた三階役者たちに坊主の拵えのまま楽屋でいじめられる、という演出もできるかと考案した。上演によつては「赤雲坊・青雲坊」が出たときもある（嘉永四年、市村座の例）ので、このあたりの役名だったと推測できる。

このほかにもエピソードに応じた演目選定はいくつか行つたが、上演作品として取り上げられなかったケースもあったものの、初代仲蔵の手記および三代目仲蔵の自叙伝を読み解き、江戸中期の劇界や舞台機構等をあらためて見直す良い機会となった。自伝や日記に詳細がない内容を検討するのは難しいことで、推測の域を出ないものも含まれたが、ドラマ制作に提供でき、結実した作品を見ることができたのは幸いであつた。令和四年度（第七十七回、これをもつて最後の贈賞となつた）の文化庁芸術祭大賞という栄誉が冠されたことも、研究成果の社会還元としてこれ以上の誇りはなく、関われたことに感謝している。

注（1）復刻本（郡司正勝校註、一九六九年刊行、青蛙房）による。

（2）『東大落語会 落語事典 改訂版』（一九九四年刊、青蛙房）

（3）一九九八年刊、講談社

（4）七代目市川新之助（現・十三代目市川團十郎白猿）の中村仲蔵、二〇〇〇年初回放送、松竹芸能・ABCによる制作。

（5）二〇二二年十二月、NHKBSプレミアム・4Kで放送、再構成された放送は二〇二二年十二月、地上波総合。

（6）『日本庶民生活史料集成第一五巻』（一九七一年刊、三一書房・『日本人の自伝別巻一』（一九八二年刊、平凡社）に翻刻が載る）

（7）大正二年（一九一三）、早稲田大学出版部
享保二年（一七三六）頃、一六〇〇石。名は別名の「族之介」

（8）からか『青森県人名大事典』一九六九年刊行、東奥日報社
本稿で参照した番付は早稲田大学演劇博物館および立命館大学ARCのデータベースによる。

（10）今尾哲也「仲蔵と定九郎」『歌舞伎 研究と批評』二六、二〇〇〇年、歌舞伎学会